も、明るすぎて、子どもたちも落ちつけず、たいへん不安定な状態です。そこでまず、少しでも暗くしおちつかせるために、布地を買ってきてカーテンを作り、取りつけました。それでもまだ明るいくらいです。保育室の前が通路のためいろいろの人が通ります。カーテンは保育室を見えないよう防止するのと、両方の意味あいでつけたのですが、布地が軽いため風が吹けば端によってしまいます。部屋を狭くし、どうしたら不安定でなくすことができるか、これは私たちの考えなければならない大きな問題です。

第三としてやはり大きな問題は、現実の子どもの姿です。園にきている九〇％は寮生活者です。子どもたちは寮という一つの地域集団に属し、寮の中の限られた人とはつねに接しているのですが、寮外の人とは接することもなく、寮外の子ども（保育園にきている外の子ども）とは、遊ぶことができないわけではないのですが、ほとんど遊ばず、寮の子どもは孤立し団結しています。寮外の生活を知りません。このことは大きなかたよりをつくっています。父親は工員ですので夜勤があります。その場合子どもが家の中ないしは、廊下で遊んでいたのではうるさくて休めないので、必要上おってできたのがこの保育園なのです。寮は木造建築のため、二階で騒げば下に聞え、隣りの家でラジオをかければ聞えてくるという状態です。このような環境の中で、しかも、おとなたちには邪魔者にされ、教育に関心のうすい親たちに育てられた子どもはどのように成長するでしょうか。この悪条件の中で、いくらかなりとも良くするには、どのようにしたらよいか、今後残された大きな問題です。

では、このような職場について学校における理論と実際を、どのようにいかすか。子どものおちつきのないのは、部屋のためばかりでなく、技術の問題が多分にあります。学校において教わった理論は片隅において、一日が終り、反省のとき、はじめてそうであってはならない、ああであってもならない、こうでなくてはなどと思い出します。毎日毎週毎月、反省がなされても進歩はないようです。

はじめてうけもった子どもたちを、来春は卒業させ小学校に送らなければなりません。自分の姿が、そのまま子どもの姿になり、自分の目の前にさらけだされるのがたいへんこわいと思います。

幼児は心身ともに成長する。先生は心身ともに日々疲労を感じる。この間のギャップをいかにして埋めるか、子どもとともにつねに若く、そして健康であり、マンネリズムにおちいらない保育がしたいと思います。

（保育所保母・川崎）

「共稼ぎ雑感」

玉木直子

保母になって早くも五年、その間に、他人はいろいろなことを言う。「尊い仕事ね」「子供と遊んでいられて楽しいでしょう」「結婚して役立つわね」「たいへんね。家庭に入ったら止めるのね」等々。まったくさまざまである。保母と家庭、本当に両立しないものだろうか。否、恋愛すら、時間がなくてできないと、現場から声が出る。女性の社会的進出、地位の向上を願いつつ、その子どもたちの福祉にあたる保母が――結婚したらやめる。あるいは、あきらめきって、干からびて行く――保母も女であり、人間なのだ。この矛盾

に、若い保母たちは皆悩んでいる。しかし、逆に、女だけに与えられた職場であるから、より理解し合うのは簡単だし、実行できるともいえる。さらに、そうしなければならないのだと考える。私の場合にしても、まったく交際期間中苦しかった。会うのはいつも七時半過ぎ、それも必ずといって良いほど、遅刻。話しあうのは夜中、そして明くる日は早番とくる。「理解し、協力すれば大丈夫できるよ」のことばを、唯一の頼みに、そして何か、自分がやらなければという宿命のように、大きな夢を見て結婚をした。それから半年。「やればできる」という自信。それには、口で表わせないほどの理解と見守る力が必要だと痛感する。私の場合、同僚の先生がたが非常に力になってくれているので、幸福である。しかし、結婚した者は、それに甘え、自分で特権的な考えを持ってはならないと思う。けれど、どんなに分っていても、時間が長いということは、非常なオーバーワークである。保育所に預ける親たちの職場はさまざまで、もし、その各々が、八時間労働を守っているとしても、勤めの前に預け、帰りに迎えにくるのであるから、最少限、保母は、九時間労働ということになり、現在では、八時間制も守られていない職場も多く、出勤時間もさまざまで、その上保母の通勤時間を合せると、まったく保母の労動時間は、何をかいわんやである。早番、遅番を交替にしても、小規模の保育所では、一週間に各々二回はまわってくる。「早くお迎えに」と願いながらも、自分が、もし預けていたらと考えるとき、どうにもならないせつなさを感じる。人の子どもを育てて、自分の子どもは臍胎しなければならない、という事実もある。子どもすら生めない生活は、どん底である。近き将来には、二交替制とか、フリーの人を置くとか、職場の中に保育所を作るとか、何とか考えなければならない。結婚したことで、保育の研究時間は少くなり、マイナスの面も大いにある。しかし、今までやろうとしてもやれなかったこと、つまり、家に帰ったら、保育のことを忘れて自分の生活をすることが、必然的にできるようになった。保育の面に、家事のことや、疲れを持ちこまないのと同時に、保育のことを、必要以上に持ち込み、家は寝るだけの、宿のような生活は、避けるべきだと思う。この必要から、五分なりと、時間内に仕事を処理することを考えるようになった。時間を合理的に使う工夫。私たちは、もっと練習しなければならないのではないか。決して怠けたいとか、時間が過ぎれば良いという考えでなく、サービスの限界をはっきり自覚することである。しかし、このことは非常に難しい。そして、結婚した保母たちを総合して眺めたときに、その家族構成によって、非常な差異が認められるという。家事に疲れきった保母、生き生きとした保母、暖かみのある保母。口では協力というが、なまやさしいものではない。夫の妻として、女としての理解だけでなく、保育者としての、尊敬と理解がなければ、とても保母と家庭は両立しない。そのために、相手の撰択は非常に考えなければいけないと、早川先生も話しておられる。保母と家庭。最近は、数多くの先生がたが両立させていらっしゃる。その方々から見れば、まだまだ、一歩踏みだしたばかりで、何もかも夢中である。これからも、多くの障害が待ちうけているだろう。後からくるかたのためにも、一つ一つ、乗り越えなければならない。理解と協力。この大きな力をもって、そして、家庭と保母などと、とりたてて考えなくて良い日が、早くくるように願っている。

（保育園保母・東京）